氏　　名	Dave LUMENTA（デーブ ルメンタ）
学位(専攻分野)	博　士（地域研究）
学位記番号	地　博　第　56　号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻
学位論文題目	The Making of a Transnational Continuum: State Partitions and Mobility of the Apau Kayan Kenyah in Central Borneo, 1900-2007 （トランスナショナルな空間生成 ―中央ボルネオにおける国家領域分割とアポ・カヤン・クニャの移動性（1900-2007年））
論文調査委員	（主　査）教授 速水洋子　准教授 石川　登　教授 田中耕司 准教授 祖田亮次（北海道大学）

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，東南アジア島嶼部ボルネオ島中央部アポ・カヤン山地，現マレーシア（サラワク州）に隣接する国境地域に居住するインドネシア共和国（カリマンタン州）の民族集団クニャに関する歴史的民族誌である。本論の目的は，高い移動性をもち，国境を越えるネットワークを維持してきた山地民クニャの移動と領域国家の空間生成にかかわる政策やその運用との関係を，1900年から2007年にいたる歴史動態のなかで考察することにある。ついては，ボルネオ中央部における国家の国境設定ならびに領域形成とクニャの人々の空間認識と移動実践を複眼的に考察しつつ，国家と社会の相関関係を分析することを主題としている。

第一章では，ボルネオにおける在地コミュニティ形成と生態学的要件の関係，流域社会の意味や国家の領域性などに関する議論を導入としながら，研究の目的と方法論，空間的ならびに歴史的な分析単位，調査方法などに言及している。

第二章では，アポ・カヤン山地部の地理的，生態学的，人口学的特徴，行政組織区分ならびに民族集団分布，クニャ・コミュニティ分布などに続いて，「通流域社会」（transbasin society）として国境部の分水嶺によって分かれる複数の水系を架橋して形成されたトランスナショナルなクニャ・コミュニティの特徴が検討される。

第三章では，クニャ社会で伝統的に行われてきたプサライ（peselai）という循環的移動慣行が考察される。男子の集団的な森林産物採取の旅や油田開発現場や木材伐採キャンプでの労働移動などさまざまな形をとるクニャの移動慣行の歴史とその具体的事例が紹介され，文化的意味や流域社会におけるコミュニティ形成との関係が論じられる。

第四章では，国境をはさんで対峙したサラワクと蘭領ボルネオ両政府の領域策定政策の考察を植民地期資料に基づいて行い，中央ボルネオにおける国境設定過程，国境部での焼畑耕作民への人頭税課税や国境交通の管理，両植民地への在地コミュニティの帰属確定と民族関係などについての具体的な政策運用を検討する。

第五章では，アポ・カヤン・クニャ人のプサライ慣行の具体的な検討を20世紀初頭から2007年にわたる地域史のなかで行う。クニャによる制度化された労働移動は，樹脂（ダマール，ジュルトン等），籐など森林産物のサラワク華人商人との交易にはじまり，のちにサラワク領内ミリの油田掘削現場やバラム流域などの木材伐採キャンプなどでの賃金労働に変化していった。時に数百人を越える集団での採取と交易の対象となった森林産物ならびに循環的移動による労働力を吸収したのは常にサラワク側の商品/労働市場であり，国境を越える商品と人々の超国家領域的流動を包摂する方針をサラワク政府がとったことが明らかにされる。

第六章では，95歳と63歳の二人のクニャ人のライフ・ヒストリーの聞き取りを通して，そのプサライ体験が明らかにされる。プサライ経験計11回にのぼる古老の回想やサラワク側での労働体験は，第三章と第四章の議論に具体的な事例を付加す

るものである。

第七章では，中央ボルネオにおけるクニャの移動性と国家領域の生成の相関性についての各章の考察を総括している。生活世界を国家の領　第七章では，中央ボルネオにおける山地民クニャの移動性と国家領域の生成の相関性についての各章の考察を総括している。生活世界を国家の領域によって分断された山地民と国家の歴史的動態の分析を通して具体的に明らかにされたのは，クニャ人の戦略的な国家領域の越境の日常的実践ならびに森林産物などの商品や労働力の移動の馴化を行う国家政策である。国家は一定の空間的境界と領域をもつことを前提とし，国家の周縁部に居住し，国境を越えて移動し，資源利用を行う人々は，領域国家のプロジェクトに相反する存在とされる。本論は，このような従来の国家と社会の関係論への対論の提出を試み，特に，国家とクニャ社会の両者によるトランスナショナルな空間連続体（transnational continuum）の生成，すなわち二つの国家領域に両属的な地域形成の過程が明らかにされる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ボルネオにおける諸民族集団の研究は，伝統的な人類学的コミュニティ・スタディ，すなわち単一の村落における共時的な参与観察に基づく民族誌的記述が主流となってきた。これに対して，現インドネシアとマレーシアの二つの国家領域を包摂する「中央ボルネオ」におけるアポ・カヤン・クニャ人の労働移動ならびに移住を検討する本研究は，サラワク領ならびにカリマンタン領の双方に存在する複数のクニャ・コミュニティでの調査実施により，そのトランスナショナルな移動性ならびに民族集団の空間的配置の考察を可能にした。歴史的な分析枠組という点でも，史資料調査は二つの植民地，およびその後の二つの国民国家を対象とし，オランダ語，英語，インドネシア語等文献に依拠した点でも，本研究に比類する中央ボルネオ研究はない。マクロな時空間を分析の対象とする本研究は，一方でミクロな共時的臨地調査に支えられたものでもある。インドネシア語，英語に加え，クニャ語，カヤン語，イバン語などのボルネオ諸言語を駆使した臨地調査により，聞き取り情報は精度を増したものとなっている。

本論文の第一の特徴は，移住および移動研究を，ボルネオ島の生態学的要件を考慮しつつ行っている点にある。現在のインドネシアとマレーシアとの国境は，自然の分水嶺を境界とした植民地期の国境を踏襲したものであり，本論の各章では，20世紀初頭から現在にいたる地域史のなかで中央ボルネオ国境地域に形成された「通流域社会」（transbasin society）の議論を中心に，国家領域を貫通する空間を自らの生活圏とする山地民の生活戦略が論じられている。

第二の特徴は，移動が国家自体の領域形成プロセスとの関連で論じられる点である。すなわち，クニャ人の移住および循環的労働移動と国家による境界ならびに領域形成の相互作用を歴史人類学的に考察する試みである。ついては，サラワク王国と蘭領ボルネオ政府，さらには独立後のサラワク州政府とカリマンタン州政府の領域と人々の帰属確定に関する制度発展ならびに運用が検討される。

第三の特徴としては，人と商品の社会的流動に焦点をあてた国家と社会の関係についての理解の試みである。河川によって人々やコミュニティが結ばれる中央ボルネオ山地では，流域社会を基盤に形成されたクニャ人の空間認識と移動実践が，国家の規制と利用の対象となってきた。特に，領域的支配よりも人的支配に重点を置いたブルック植民地政府は，流域を基盤とした社会編成を意識的に利用し，国境を越えて自国領に流入するクニャの人々が経済的，社会的，そして文化的にサラワク国家に適応的定着を図ってきたことを了解していた。独立後のサラワク州政府も，これらの移動民に排除ではなく，包摂の観点から対応し，もたらされる森林産物や労働力を意図的にその市場で吸収する政策をとった。サラワクにおいては，国境を越えた人とモノの流入がながらく容認され，国家によるトランスナショナリズムの馴化が現在も進んでいる。クニャ社会とサラワク植民地ならびに州政府の歴史的な相互関係，特に，人と商品の国境を越える流動をサラワク側の市場形成のプロセスのなかで論じる本研究は，国家と社会を対立物とする二項対立的な視点を超えるものとなっている。

よって，本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また平成20年１月15日に論文内容とそれに関連した事項について試問した結果，合格と認めた。